

中
勘
助

貝
桶



貝
桶

わぎもこをなことはいはじ安房の浦の夢のかよひぢ波は
よるとも

大正十三年二月十六日

夜昼となく吹きまくる風にとじこめられてちつとも外
へ出なかつた。ここへ来てから二晩ともよく寐ねられなか
ったのを今朝明けがたからぐっすりと眠った。風がやん
だのだ。目をさましたら急に寒くなっていた。しかし静

なのは暫くのあいだで食事をすますじぶんにはまた風が
たつてきた。けれども熟睡で元気づいた私は勇んで散歩
に出かけた。田舎には珍しくないが都会らしい都会では
決して見られないようなしんみりとしてかすかに寂しみ
のある路みちである。それはどこまでも一筋に長くのびて、
よく繁った生垣のあいまにぼつりと店屋などがある。そ
こには丈夫な荒骨の腰障子こししょうじがたつてふつくらしした感じの
する障子紙に 荒物 とか 塩せんべいとか 商あきなう品物
が黒々と書いてある。私は これは酒屋だな とか こ
こは穀屋こくやだな などと思ひながらゆく。穀屋といえは、

そこには白豆や黒豆、粟、黍きび、ささげなど。それぞれの粒、形、色、光沢をもった種々の穀物や、それをひいてつくった粉類が浅い桶にはいつて並んでるであろう。いったい私は美しい穀物を見たり、その粉の匂をかいたりするのが好きなのだが、またそれがただの砂金や宝石のたぐいではなくて食べては体の養いとなり、蒔まいてはみずみずしい草木となるというところにもなにか有り難いような、不思議なような。いいしらぬうまみのある愛著をおぼえるのである。亭主はつるさげた束から紙袋をちぎってふつと息でふくらませ、底ぬけみたいに口の太い

漏斗じょうごをさしこんで一合二合とはかってくれる。そのあいだに私は赤や青に彩った花麩はなぶに見とれたり、昆布や椎茸の匂を吸いこんだりしている。——私はいつしか幼い頃の思い出に耽っていた。そんなにして店から店へと眺めてあるくうちにある家の障子に 蛇の目ずし と書いてあるのが眼についた。

これやこの 安房あわの国なる

蟹あまのすむ 海べの小村

潮風に なやむ若葉も

花もなき はにゆうの鮎屋

むくつけき 弥左やざはあれども

丸ぼちやの お里はみえず

しまつとり われはうえたれ

まずかるな 蛇の目めずし

私は思いついた誰かれに絵葉書を出そうとおもつてとある万屋よろずやの店へはいった。そうして埃ほこりでざらついた売れ残りの絵葉書をボール函のなかからよりどってるうちに紙一杯の蘇鉄そてつのついたのが出てきた。安房名所岩井村

大蘇鉄 とある。私はかみさんに

「蘇鉄ってどこにあるんですか」

とたずねた。かみさんは この道をまっすぐ行って、それから左へ曲って、右へ曲って、どこまでもいくと左側の家にある という。私はちよつと退屈した旅行家の好奇心をおこしてさして見たくもないくせに

「見せてもらえるでしょうか」
ときいた。

「ええ、ええ、ただの百姓家にあるんですから」
という。教わったとおり曲り曲ってゆく。思ったより遠

いし、道もまぎらわしい。とある寺の角で立ち話をしている人に

「大きな蘇鉄つてのはどこですか」

ときいたら話をやめて この道をどこまでも行くとはずれの家にある という。

「見せてもらえまじさつか」

「ええ、ええ、ただの百姓家にあるんだから」

といって笑った。私はこんな問いをくりかえすことによつて内心つまらないときめてる蘇鉄になんとかして勿体をつけようとしてるらしい。で、ちよいとむつかしそう

な返事でもしてくれれば都合がいいものを彼らは私の気
もしらずに無造作に 縦覧随意だ と答える。私はいよ
いよつまらない気になって行くうちに広びろとしたここ
ろへ出てしまった。蘇鉄が見えない。私も背が高いし、
蘇鉄も背が高いのだから見えないはずはないのだが な
ぞと埒らちもないことを考える。結局路ばたの畑で草をとつ
てる女に三度めの蘇鉄をたずねた。女は私の来たほうを
指して この道をすこし行くと右側の納屋のある家にあ
る と教えた。ひっ返したら納屋があった。それについ
て庭へは行ってゆく。庭といっても農家の庭で、広いに

は広いがただのあき地だ。母家の縁側に手拭を被った婆さんが日向ぼっこをしながら子供の守をしている。私は帽子に手をかけて

「こんちは」

といつにない愛想のいい挨拶をした。まだなんとかして物にしようとしている。

「あい」

婆さんは気のない返事をした。右手の井戸ばたでかみさんが洗濯をしている。

「蘇鉄を見せてもらいます」

今度はそちらへいよう。

「あい」

まただ。どうしてみんなこんな腑ぬけふなのだろう。そこに一株の蘇鉄が生えている。なるほど大きいには大きい。いがただの蘇鉄だ。私はさも仰天したらしくそれを見あげて

「何年になるんですかね」

「何年だかね」

さっさと洗濯物を干しに行ってしまった。そこで性懲しょうこりもなくわざわざ後ろへまわって見あげてみる。鰻うなぎに

なつて天上もしない。私はよく嘸はなしにある、初手から承知で出かけていってつまりはやっぱり狐につままれる田た吾ご作さくみたいな気もちですごくすごと帰ってきた。

海風の 寒きこの日を

名にしおう 蘇鉄をみると

いわい村 いわいもとおり

村はずれまで たずねてくれば

あんだこの 蘇鉄の野郎

もくもくと やたらはびこり
 あらばこそ なんのへんてつ
 大きいはずうたいばかり

なめげなり 都の人よ

我こそば 唐土舶来

そのかみは 天竺てんじくそだち

ぎしやくつの 山に千年

三国を 小股にかけて

今ここに 海に千年

いやしくも はばかりながら

世のつねの 雑木にあらず

あなおこの この蘇鉄もや

あなおかし この蘇鉄もよ

自惚うぬぼれも 厚かましさも

ずうたいも 我にさながら

さあれこそ わがともがらぞ

はしきよし わがはらからよ
 生いたてれ 千とせ八千とせ
 のふぞうに 雲のうえまで

十七日

朝から貝をひろいに出かけた。路の両側はおおかた背
 の高い^{まき}槇の垣根になって、檜や、珊瑚、樹^{じゆ}や、もっこく
 などの闊^{かつ}葉^{よう}樹^{じゆ}がまじり、時には竹藪もある。日蔭の朝の
 気が青く凝^{こご}つてうす寒く肌^{こご}にふれる。波の音がきこえて
 きた。背^{しよ}負^よい梯子^{はしご}をしよつて働^{たび}きにでる人^{たび}たちに度々出

会った。ちょうどそんな時刻なのだ。ぬけ穴みたいな小路をとおって海岸の砂丘のうえに出たらそこに漁師の婆さんがいた。

「今日は、あたたか暖あたたかですね」

私は気嫌がよかったにちがいない、めったにこんなことはいわないのだから。

「西だね」

彼方あちらはむしろ不気嫌に答えた。西だから寒い——もつとも尤

だ。が、私は東京を標準にしていたのだ。西が吹いちやなんにもとれやしない——婆さんの不気嫌の原因はこ

の方にあるらしい。舟という舟は高く砂丘のほうにまで曳きあげられて、帆が稲塚の形に巻いて立ててある。私は人げのない浜へ降り七、八町西のほうに双角の犀さいのよくな恰好に突き出てる岬にむかって歩きはじめた。地震の時の崖崩れのために到るところ灰色の斑まだらができている。私はしつとりと湿って波模様のついた砂のうえを貝を拾いながらゆく。潮に濡れた海藻や貝殻がとりどりの色鮮あざやかに象眼むらさきうされている。私はまず小さな紫海胆にの殻をとりあげた。これはネプチューンの王冠である。それから錫色すずいろのいたや貝を。呪われたこの帆よ。汝は雄々し

いトリスタンの命をとった。その次には燃えるような朱色の逆鱗げきりんをたてた錦貝にしきがいをひろった。直径一寸ばかりのいびつな円形のなかに大小三十幾個の灰白色の亀の手がびっしりついている。サラセンの天幕だ。町という町はフムムム悉く兵火にかかっている。その光は平野を紅にそめて彼らの天幕にまでも映っている。そんなにして私はひとり興じながら知らずしらず海のほうへ海のほうへとひかれて不意にうちよせる波に足を洗われたりする。濡れるほど貝の色が鮮あざやかだし、深みへゆくほど沢山ありそうな気がする。古いフイニシヤ人はこのような気もちで岸

から岸へ、海から海へと彼らの「紫」を求めて船を進めたのであろう。彼らは花さくチルの町を建てた。その「紫」はチルの誇ほこりであつた。私はまたこれらの貝殻を集めて象牙の塔を建てようと思うのである。

私はとうとう岬の根もとまできた。風蔭しずかになつて静あたたかに暖あたたかである。絶壁の頂をかざる緑のなかに鶉ひよどりが鳴き、一面に干あがつた岩礁にはまっ青に苔が生えて腹白鵲はらじろせきれいががあさっている。ここは波の寄せ具合で海藻や貝殻のたまるところである。私は岩壁にかこまれたこの安穩なところがすっかり気に入った。そしてほんとうに子供らし

い有頂天と貪婪どんらんをもつて眼うつりをしながら貝をひろいはじめた。昔モーゼの仲間が紅海の干潟をわたって亜細ア亜へと逃れたときに彼らはそこで貝を拾うためにどんなにか暇をとつたであろう。けれども彼らは決して追手おつてを恐れるにはあたらなかつた、なぜならば追手もまた貝を拾わずにはいられなかつたであろうから。

……ここにおいてパロとモーゼと互たがいにいいけるは、見よ、我らはかかる美しき貝を得たり。我らの胸は喜よろこびに充てり。いざ、我らここによしみを結びて我らの神を

たたえん と。かくてイスラエルの人々エジプト埃及の人々と手
 と手をとりにてこの歌を謡う。云く 我らラーを謡いほめ
 ん。我らエホバを謡いほめん。彼らは高らかに高くいま
 すなり。彼らは紅海を干潟となして我らに美しき貝をさ
 ずけたまえり。その色は花のごとく、その光は玉のごと
 し。時にイスラエルの女たちふりつづみ 鼗ふりつづみ をとりかつ踊るにパ
 口の軍勢の頭たちも兜をぬぎてともに踊る。彼らは美し
 き貝をさずけたまえり。その色は花のごとく、その光は
 玉のごとし と。彼らの歌は峙そびだてる海に響き、その足
 踏みは紅海の底をとどろか轟とどろかせり。

これは私の出埃しゆつエジプト及記である。そうしてもしこうであったならば、それこそイスラエルの子が夢想したよりもさらによい摂理だったのである。

十九日

どれも美しくまぎらわしい浜への小路をたどって目あての網小屋のところへうまく出ることができた。今日は東へむかってゆく。と、鳥からすが七、八羽集ってなにかしていた。私はそろそろ彼らのほうへ近づいていた。

「おはよう。御免を被^{ごうむ}ります」

そんな気もちで。彼らは歩いたり、ひよんひよん跳ねたりして、手近に積んであるしいらのうえにとまって横目でじろじろ人を見ている。

「おはよう。さあどうぞ」

そういうように見える。私はこの鳥のどこか^{ざいこうくさ}在郷臭いのが好きだ。私は彼らのあけてくれた道をとおる。先生朝飯に鮪^{まぐろ}の頭を食ったのだ。彼らはうまくやってるが私にはいっこう思わしい獲物がな^いい。終^{つい}に飛びこえるにはすこし広い小川のふちへきてしまった。私は落胆し

た。ほかのものはともかく螺にしの立派なのがひとつも手に入らない。しかしなお執拗に望をすてないでもう一筋だけ陸へよった貝殻の帯にそうて捜しながら帰ることにした。波うちぎわから遠いだけ貝が大きまばらく疎まばらにおちてるので身を屈かがめずに楽に物色することができ。私は間もなくひな貝の完全なのを見つけた。なんとという微妙な曲線だろう。それから淡紫色のうみぎく？ を。外套の右のかくしに入れる。丈夫なのは右、脆もろいのは左ときめてある。存外油断がならないぞ そう思って私はだいぶ元気づいてきた。次にはまがきをひとつ、形は好かないが

色の配合のために。総じて自然は私よりもよほど自由に寛大な芸術家のようにみえる。そんなにして私はせわしいほどいろいろさまざまな貝をひろった。概してこの帯には綺麗なものよりは渋いもの、凝ったもの、変ったものが多い。思いがけぬ収穫にほくほくしながらゆくうちに奇態なものがころがってるのに気がついた。やっぱりなにかの貝だと思ったにちがいない。拾おうとしたらほこ河豚ふぐだった。私はそれをそうっとかくしへ——左のだけ——入れながら思わずくっくっくとふきだした。そうだ。ツータンカーメンだ。このフアラオはすこし生臭いの

閉口するが。彼はたぶん二、三日まえまでは広大無辺なその領域を悠遊ゆうゆうしてたのである。それが一朝運命の波に弄もてあそばれてこの浜にうちあげられた。そして太陽という偉大な技術家が忽たちまちに彼をミールにしてしまったのである。私は得意に網小屋のところまで戻ってきた。小屋の戸があいて網が一面にひろげられ、そのうえに漁師たちがあぐらをかいて破れめをつくらっている。坊主頭に紅木綿の向う鉢巻をして神妙にあばりをおしてるのがなにかおどけた虫けらみたいな感じをあたえる。私はその網の縁にそうて砂丘をこえて帰った。

私は件くだんのはこ河豚を机のうえに、大きなまて貝のうえに坐らせた。筏いかだにのつて常世とこよの国から吹き流されてきたかたちだ。見れば見るほど奇態な奴だ。いったい海のなかにはときどきこうした剽軽者ひょうきんがいる。これは造化たわむれの戯たわむれでもあれば驚くべき妙工でもある。私は採集した貝の水けを拭きとり、砂をおとし、溝のなかなぞにはさまってるのを物のさきでたんねんに掃除して机にならべるうちに大小百何十の貝がいったいになった。あらゆる形、あらゆる色、あらゆる曲線、無地も、小紋も、更紗も、飛白かすりも、好み次第にある。それに見とれなが

ら　こんなにしてるがまた可愛い子供にでもねだられれば目を細くしてやってしまふのだ　と思う。そうしてそう思うことが嬉しくてひとりでにこにこしている。

午後。庭の樟くすの木の蔭で子供たちがうすべりを敷いて遊んでいる。どういう場面なのかみんなころころ寐ころんで眠ったふりをしている。とにかく夜だ。そのなかのひとりが赤ん坊——人形ではない。ほんとの赤ん坊だ——をそばにねかせ、自分の羽織をかけて守唄をうたいながらたたきつけている。これはまねことでもあり、本気でもある。

かちかちやーまのどら猫はー
人せえみーればくいたがるー

この小さな孟母もうぼは子供を坂田の金平きんぺいにする気らしい。
女中が茶菓子にあべかわをもってきた。私は彼女が田
舎娘らしいのと、そのくせなかなか利口で要領がいいの
とが気に入っている。

「まあ綺麗な」

彼女は貝を見ていった。もしそれがお愛想ならば私が

ここへきてから唯一無二のお愛想だ。彼女の名はお竹と
いう。

お竹十七房州そだち

頬が赤うて丸顔で

鼻は団子で目はさがりめで

世事はいわねど愛嬌者で

唐土伝来孟宗竹の

ほんにみのあるお竹どん

お竹十七島田にいうた

花のかんざしたてやの字

鹿かの子まだらにお白粉しろいつけて

出尻でつちりはとむね鳩胸わにそと鰐わにあるき

いきでいなせでまっ黒助な

鮪まぐろみたいな殿もたしよ

だいだい飾りしめかざり

つくや牡丹ぼたん餅杵もちきねの音

小屋にはうえし牛の仔が

かいばをねだる胴まごえ

どうだね爺さん かいばをやんなよ

そんなに食わせちや もと値がきれるよ

じやがとて爺さん もぎどじやねえかよ

婆さん世のなか そろばんずくだよ

こけこっこっこっこっこっこっ

安房の浜べの漁師村

今日は正月十五日

さらの駒こま下げ駄たいそいそと

やどりに帰る娘っ子

二十二日

おれの素姓をかたるなら　はばかりながらこのえの九重の

花のお江戸のまんなかで　音にきこえし神田っ子

性にあわねば生粋の　纏まといもちにもならないで

四十男の今日までも　あきずにまわす火の車

大八車横車　おしてもとおす口車

たから車はむこうから　よけるぴいぴい風車

うき世三界くるくると　まわりあるけばぜひもなや
縞しまの財布もきんちやくも　江戸の名物からっ風

夕。この辺は気候が暖いせいか方々に柑橘類かんきつを植えて
いる。この中二階のしたにも二株の夏蜜柑がある。私は
読書に倦うみ筆をとり疲れたときなど障子をあけてそれを
眺める。暗緑の厚ぼったい葉のあいだに目のさめるよう
な数十の黄色い果み、それはおおかたの花のように風に散
り色のあせてゆくあわただしさ、うわだたしさはなくて、
咲いたものではなしに結ばれたものにふさわしい静な落

ちつきをもっている。そこには桃や林檎りんごにみるような
やわらか柔み、あたたかみはないかわりにときじくのかぐの木
のみらしい一種の趣がある。私はこの夕べをまだ歌いな
らわぬ鳥がまぢかい木ぬれでこっそりと囀とんせうりこころみ
るのをききながら、しめやかにふる春雨がその葉をぬら
し、甘露のような雫がその実をつたうのをじっと眺めつ
くしていた。そうしてふと幼少の折のことを思いだした。
そのじぶん私はあまりに美しいものの刺戟に堪えかねて
——その息のつまりそうないらだたしい悩なやみを今も感ず
る——それを無茶苦茶にしてしまうことがよくあった、

たとえば草双紙の絵を墨で塗りけしたり、麦藁細工の綺麗な箱を踏み壊してしまうというように。そしてこの頃でさえも私の五感すではそれが謂いう所の快感を齎もたらす場合のみを考えても已すでに大きな重荷である。もしこのうえなにかの感官があつたら私は感覚に殺されてしまうであろう。

二十三日

山あいの
勝山かつやまみちを

うねうねと のぼりゆけば

春なれや 路みちばたの

馬糞より 犬の糞より

ほほらだつ かぐのかぎろい

林に鳴く ひよどり

めじろ すずめ

のさり ばたり

たらたらと たれる 涎よだれ

山なす 肥こえたご

背負いくる すほんだ

そのあとに 千鳥足

くわえぎせる姻管の 仁にえもん右衛門

べたりべたり ほういほい

すれちがう 都みやこびと人に

愛想にたたく 牛の尻べた

二十四日

この部屋から見降す西側の畑のくろには枇び杷わの若木が
 ならんで綿毛の生えた葉のあいだに白っぽい蕾がふくら
 んでいる。そのなんの風情もないすうつとした枝や木ぶ

りがなにがなし私を喜ばせる。この枇杷を見ると私はあの山田を思いだす。彼が死んでからもう十年にもなるだろうか。私はひと夏彼が保養してた播州のある片田舎へ遊びにいったことがあった。山田は家で持つてる一軒の田舎家に一人いて大阪通いの百石船の船頭夫婦に世話をさせていた。私はそこで厄介になりながら我儘わがまま一杯にふるまい、威張り放題に威張りちらした。そのじぶんのむしやくしやした私にはそれがなによりの気保養だったのだ。しかし永い間には善良な山田もさすがにたまらなくなつてなにか愚痴みたいなき情みたいなきことをいったに

ちがいない。で、ちよつといさかいみたいな具合になった。彼はほんとに堪忍袋をはちきらしたらしかつたが、こちらは平気だった。私はいつものように庭へもちだした帆布張りの手製の安楽椅子に寝そべって黙っている。むこうも黙ってたが、やがてそばにある枇杷の木へ登って実をとってくいはじめた。ちようどこんな若い木で、あまり大きいほうではない山田が登っても折れはしないかと思うほどゆさゆさした。黙って食って黙って種子たねをはきだしている。やや暫くそんなにしてるうちに

「おい枇杷をくわないか」

てなことをいいかけた。声がふるえている。知らん顔している。するとこんどは人をめがけて種子をぶつけはじめた。で、とうとう私が笑いだしたかどうかして芽出度めでたく和解した。十五、六年も前のことである。山田は善良そのままの人間だった。その善良は生れつきだった。悪いことをしないのではなくて出来ないのだった。彼は道徳的方面においてはもとより芸術的方面においてさえも感謝すべき多くのことを私に教えた、彼はそれらについて心から己おのれを貧しいものとして卑下してたにもかかわらず。もうひとつ私に山田を思わせるものは真理に対す

るその最も真摯しんしな、無私な、微塵も曇りのない熱愛である。私の仲間のうちで彼のみが真に真理を愛する者であった。彼こそ真に真理を求めらる者であった、そういう私はかつて真理を知らず、また求めらるすべも知らないのであるけれども。

二十五日

宿のおばさんが小浦こうらの浜へ行くと貝が沢山あると教えてくれたので朝早くから出かけた。ひとつ村だけけれど隣の浜で、その名のとおり小さなところだ。沖には紫の幕

を張ったように濃い霞かすみがたちこめて、帆前船の歪形わいけいの帆が幻のようにそのなかへ消えてゆく。浜には足の踏みどころもないほど貝があつた。よく夢で七珍万宝が山のようにならんと積んであるところへゆくとそれが化けものの住みかだつたりする。ちよつとそんな魘おそわれるような気もちがあつた。しかし私は幸さいわいみこし入道にゆうどうにつるしあげられもしずに無事に根気よく拾いはじめた。

小浦のはまに きてみれば

さくら貝 帆貝

きぬがさの 貝もよれ
その貝の なな色におう この浜を
わたつみの 宝の浜とこそよばめ
あわれこのはま

二十六日

石原に のりとる乙女
渚に 貝ひろうわれ
ほのぼのと 海はかすみて

春の雲　しずかにうごく

うららかに　光さして

かぎろえる　あしたの浜に

なれはとる　いのちのたずき

われはひろう　こころのかて

鯖よしかねえ　かん鯛だい安いよう

帰りくる　海べのそばじ

すれちがう　賤しずの女めが

肩なる籠に　はねるいろくず

かわはぎ かさご

かん鯛 ぶだい

いさぎよき 魚のかずかず

宿六が きょうの海さち

山かげに 姿はきえて

潮風に のこるよびごえ

さばよしかねえ かん鯛安いよう

三月二日

きおうかじきかすつきりと

五つならんだ新造ぶね

艫ともにはなびく大漁ばた

赤の大の字二つびき

今日は大漁じゃ大吉じゃ

鯖じゃ小鯛じゃびんながじゃ

えんやえんやらえんさつさ

みよしをみがく小若い衆

日本文学電子図書館

貝 桶

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：「中勘助随筆集」

岩波文庫、岩波書店

1985年6月17日 第1刷発行



日本文学電子図書館